愛知県立看護大学紀要 Vol. 12, 67－74, 2006
Bull. Aichi Pref. Coll. Nurs. Health

■ 資 料 ■

基礎看護学実習において実施した看護技術に対する学生の達成感とその理由

曽田　陽子，小松万喜子，水野　美香，大島　弓子，田代　ひろみ，佐藤　美紀，門井　貴子

Students' Attainment of Nursing Skills in Fundamental Nursing Practice and Their Reasons for the Results

Yoko Sota, Makiko Komatsu, Mika Mizuno, Yumiko Oshima,
Hiromi Tashiro, Miki Sato, Takako Kadoi

キーワード：看護技術，達成感，基礎看護学実習，看護学生

Ⅰ．はじめに

看護基礎教育の場においてこの数十年，看護実践能力の低下が指摘され続けている．2003年にはそれを示唆する「看護基礎教育における技術教育のあり方に関する検討会」報告書[1]が出され，臨地実習において看護学生が行う基本的な看護技術の水準が具体的に示された．また臨床側からは，新人看護師の卒業時の看護技術の修得状況と臨床で求められる看護実践力との間に大きな乖離があること[2]や，看護基礎教育では修得困難である臨床実践能力を育成するための卒後研修の制度化が急務であること[3]などが報告されている．このように新人看護師の看護実践能力の低下に対しては教育側と臨床側が一丸となって取り組むことが必要となってきており，看護基礎教育においては看護技術を修得していくための教育の検討が今まで以上に重要な課題となっている．

看護技術の習熟をはかるためには，繰り返し練習を行うことが不可欠であり，そこには学生の能動的な取り組みと，その取り組みへの動機づけが必要となる．桂ら[4]は，学生は初めて患者に看護技術を実施することになる基礎看護学実習が近づくと，患者への実施を想定して看護技術の練習に熱心に取り組むことを報告している．しかし看護技術を習熟するためには，看護技術の自己学習を基礎看護学実習終了後も，そして各看護学の学習を深めながら卒業に至るまで積み重ねていくことが重要である．

原田は[5]，学生は臨地実習において様々な困難に遭遇し，それを乗り越えていくなかで得られた達成感は学習意欲を向上させ，主体的な学習を促すと述べている．看護技術の修得においても同様であり，臨地実習で看護技術を実施する際に学生が経験する困難とそれを乗り越えたことにより得られる達成感は，看護技術の修得に向けての動機づけとなり，学生の能動的な取り組みを促すことが期待できる．とりわけ，初めて患者に対して看護技術を実施する基礎看護学実習において学生が感じる達成感やその内容は，実習終了後の看護技術の自己学習のみならず，各看護学の学修にも影響を与えるものと考える．

原田ら[5)6)]は実習に対する学生の総合的な達成感や満足感を調査しており，そこでは『患者との関わり』と『自分自身』が実習の達成感に影響する要因としてあげられている．また片山ら[7]は，学生が実習の満足・不満足場面として，患者の行動や言葉による反応や実習記録が十分書けなかったことなどをあげていたことを報告している．しかし看護技術の実施に焦点をあてて達成感を明らかにした研究は見あたらなかった．そこでわれわれは2005年に「基礎看護学実習における看護技術の経験状況と技術修得の課題[8]」を報告し，この点について引き続き検討していくことが重要であると考えた．なお，田代らの報告[8]では学生の技術「達成度」の自己評価に着目していた．しかし，その結果の分析および継続的な調査の必要性があることを討議する過程で，「達成度」は認知領域，精神運動領域の評価ととらえられやすいため，情意

愛知県立看護大学（基礎看護学）

領域も包含する表現として「達成感」の方が適切ではないかという結論に至った．そこで今回の研究では，基礎看護学実習において学生が看護技術を実施することによって得ている達成感の程度とその理由を明らかにすることを目的として取り組んだ．

達成感とはある目標の達成に成功したという感覚であり，学生が感じている看護技術の達成感の程度や理由が明らかになれば，学生の達成感を高める看護技術指導のあり方を検討することができ，また，達成感と動機づけの関連について研究する糸口を得ることができる．看護実践能力は看護基礎教育だけで高められるものではないが，看護基礎教育の，しかも基礎看護学実習という早期からその向上に取り組んでいくことは，看護実践能力の育成に貢献できると考える．

Ⅱ．目的

基礎看護学実習において実施した看護技術に対する学生の達成感の程度とその理由を明らかにする．

Ⅲ．研究方法

１．対象

Q大学看護学科において平成17年度基礎看護学実習Ⅱを履修した２年生81人を対象として調査を行い，全員から研究協力への同意を得た．このうち有効回答が得られた79人（97.5％）を分析対象とした．

対象学生は１年次に基礎看護学実習Ⅰを，２年次に基礎看護学実習Ⅱを履修している．それぞれの実習目的，実習目標，開講時期を表１に示した．

２．調査方法

基礎看護学実習Ⅱの実習開始前に「実習経験用紙」を履修者全員に配布した．実習経験用紙中の質問を研究に使用したい旨を，研究の目的と方法および倫理的配慮などとともに文書および口頭で説明を行った．記入後の「実習経験用紙」は，研究協力への同意を確認する文書とともに実習終了後に所定の箱に提出してもらった．

３．調査内容

本研究に使用した「実習経験用紙」中の質問内容は以下の３点である．

１）看護技術の達成感

看護技術を実施して達成感が得られたかを質問し,「得られた」「まあまあ得られた」「あまり得られなかった」「得られなかった」の４段階から該当するものを１つ選択してもらった．

表１　Q大学基礎看護学実習の目的および目標

１．基礎看護学実習Ⅰ
　１）実習目的
　　今まで基礎看護学で学んできたことを活用しながら，患者・家族のニーズや，それらを取りまく療養環境を知る．
　２）実習目標
　　⑴　学んだ知識・技術を用いながら，患者・家族と良好な関わりを持つ．
　　⑵　患者の実際の生活を知り，その人が困っていることや援助の必要性を理解する．
　　⑶　患者の療養生活を支えている他部門・他職種の機能を知る．
　　⑷　看護学生として誠意ある態度がとれる．
　３）時期と期間
　　１年次後期，11月に１日と２月に４日間

２．基礎看護学実習Ⅱ
　１）実習目的
　　基礎看護学で学んだ内容を活用し，患者を生理的心理社会的全体として理解するとともに，その状況に合った看護の一部を実際に展開する．その体験を通し，患者・家族にとってよりよい看護実践のあり方についての考察を深め，今後の看護学の学びの基礎とする．
　２）実習目標
　　⑴　受け持ち患者の看護過程を一連のプロセスを経て，指導を受けながら展開できる．
　　⑵　受け持ち患者の状況に合った看護技術を，指導を受けながら実施できる．
　　⑶　患者・家族と円滑な人間関係を築くことができる．
　　⑷　患者・家族に対し，実施した看護がどのようであったかを考えることができる．
　　⑸　看護学生として誠実な態度がとれる．
　３）時期と期間
　　２年次前期，９月に２週間

2）看護技術の達成感が得られなかった理由

達成感が得られたかの質問に「得られなかった」「あまり得られなかった」と回答したものに，達成感が得られなかった理由を質問し，18項目の選択肢のうち該当する項目を複数回答で選択してもらった．18項目の選択肢は田代らの研究[8]において抽出された「達成度がなかった理由」12項目について吟味し作成した．

3）看護技術の達成感が得られた理由

田代らの研究[8]は達成度がなかったとする理由に焦点をあてており，達成度があったとする理由については明らかにされなかった．そのため本研究では，達成感が得られた理由については選択肢を設けず，達成感が得られたかの質問に「得られた」「まあまあ得られた」と回答したものに，達成感が得られた理由について自由記載を求めた．

なお，Q大学では実習開始前の実習オリエンテーションで，基礎看護学実習において学生が学習する看護技術項目として，日常生活行動の援助項目など34項目を一覧表として配布している（表2）．これらの看護技術は対象患者の必要に応じて実施されるものであり，すべての項目に対して実施を求めるものではないこともオリエンテーションで説明している．本研究において「看護技術の実施」と表現しているのは，これらの看護技術項目の実施を示している．

4．集計・分析方法

1）看護技術の達成感についての4段階評定と，達成感が得られなかった理由18項目の回答については，項目ごとに単純集計し傾向を分析した．

2）達成感が得られた理由の自由記載については，意味内容ごとに1件としてデータ化し，意味の類似性から分類しカテゴリー化した．分類にあたっては基礎看護学領域の教員3人が一致するまで検討し，妥当性の確保に努めた．

5．倫理的配慮

本研究では，基礎看護実習Ⅱを履修した学生が記名で記入した「実習経験用紙」の一部の記載内容を使用した．「実習経験用紙」を記名にした理由は，記入された学生の疑問や意見等に対して，その問題解決のために個別の適切な教育的関わりを行うためである．しかし記名することで個人が特定され，それによって不利益が生じないようにするために，研究データはコンピュータ入力をする際にはコード化し氏名とデータが連結できないようにした．学生に対しては，実習開始前の質問紙配布時に研究の目的と方法を口頭および文書で説明し，回答の一部を研究に使用することへの同意は自由意思に基づくこと，またデータは数量的な処理をすることにより個人名は特定されないこと，結果を公表するときは個人を特定できるような情報は公表しないこと，回答内容や協力の有無

表2　Q大学基礎看護学実習Ⅱの看護技術項目一覧

実施技術項目＊		見学技術項目＊＊	
1	環境整備	19	滅菌物の取り扱い
2	ベッドメイキング	20	滅菌手袋の装着
3	就床患者のシーツ交換	21	ドレッシング材の貼用・交換
4	就床患者の寝衣交換	22	包帯法（各種包帯の使用）
5	T，P，R，BPの測定	23	導尿（持続的導尿を含む）
6	体位変換	24	膀胱内留置カテーテルの管理
7	車いすへの移動・移送	25	浣腸
8	ストレッチャーへの移動，移送	26	与薬（経口，経皮膚，経粘膜）
9	清拭（全身・部分）	27	与薬（注射：皮内，皮下，筋肉，静脈内）
10	足浴	28	与薬（点滴静脈内注射の準備・管理）
11	陰部清拭・洗浄	29	検体採取（尿，便，痰）
12	入浴・シャワー浴	30	検体採取（静脈血採血）
13	洗髪	31	酸素吸入
14	口腔ケア	32	ネブライザー
15	床上排泄の介助（尿器・便器）	33	吸引（口・鼻腔内）
16	ポータブルトイレの介助	34	経管栄養
17	食事介助		
18	罨法		

＊　指導を受けながら実施する看護技術
＊＊　実施せず見学を通して学修する看護技術

は成績評価に一切影響しないことを説明した．同意の確認は文書で得た．

Ⅳ．結果

１．看護技術の達成感（図１）

看護技術の達成感は，「得られた」が８人（10.1%），「まあまあ得られた」が23人（29.1%），「あまり得られなかった」が45人（57.0%），「得られなかった」が３人（3.8%）で，「あまり得られなかった」と回答したものが最も多く，全体の57.0%を占めていた．

２．達成感が得られなかった理由

達成感について「あまり得られなかった」と「得られなかった」と答えた48人に達成感が得られなかった理由を質問し，18項目から該当するものを複数回答で選択してもらった．その結果を図２に示した．

18項目の選択肢のうち選択数が上位の項目をみると，「技術不足のためうまくできなかった」28人，「緊張してしまいうまくできなかった」24人，「知識不足のためうまくできなかった」22人，「患者の自立度が高く実施できる看護技術が少なかった」が22人，「練習不足のためうまくできなかった」19人，「患者の個別性に合わせた看護計画が不十分だった」19人などであり，看護技術の実施により自分自身の未熟さを実感したことや事前準備不足のために看護技術がうまくできなかったことなどを達成感が得られない理由として多く選択していた．また，実施する技術が少ないことも達成感が得られない理由として多く選択されていた．選択数が少なかった項目は，「患者から好ましい評価を得られなかった」７人，「教員や指導者から好ましい評価が得られなかった」２人などで，他

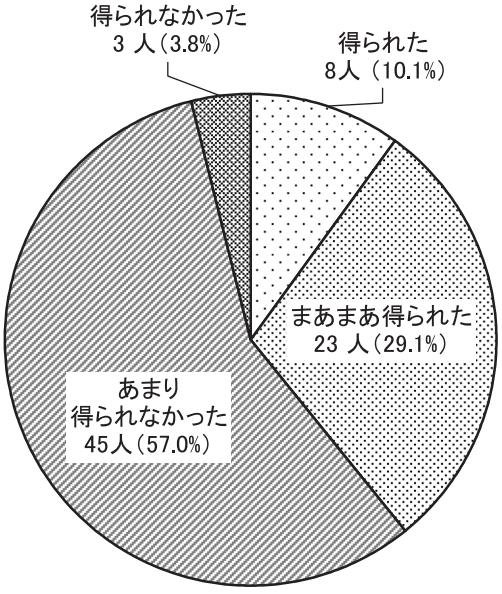

図１　看護技術の達成感（n＝79人）

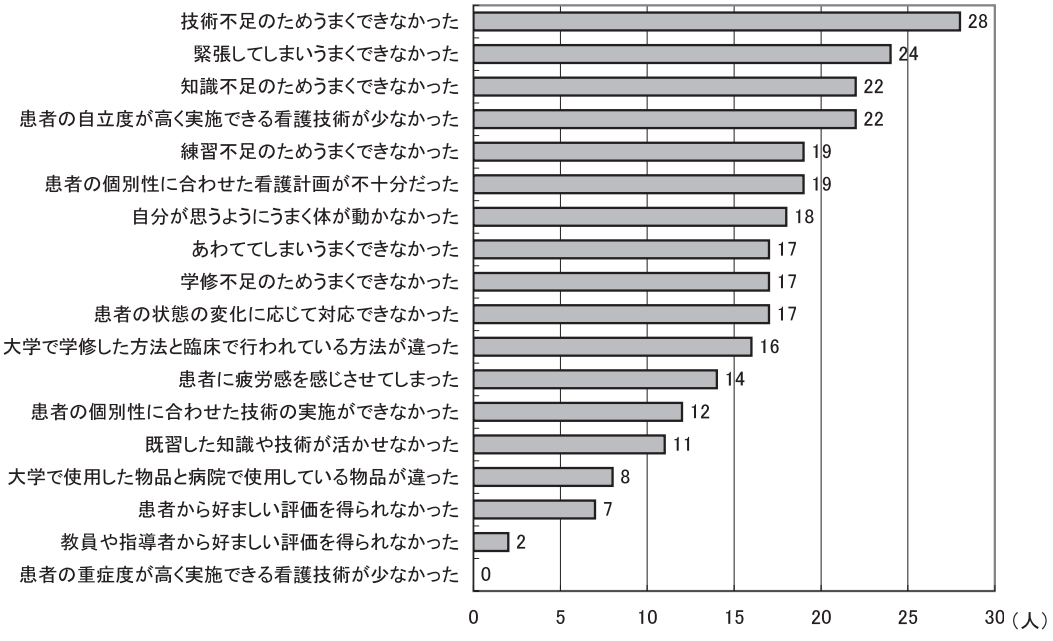

図２　看護技術の達成感が得られなかった理由（複数回答）（n＝48人）

者からの評価を理由にあげるものは少なかった．なお，「患者の重症度が高く，実施できる看護技術が少なかった」は０人であった．

３．達成感が得られた理由

達成感が得られた理由としては，達成感について「得られた」「まあまあ得られた」と答えたもの31人のうち30人から39件の自由記載が得られた．これらを内容の類似性から分類した結果，３カテゴリー【看護技術を実践して学んだ】【患者からよい反応が得られた】【その他】と，12サブカテゴリーが抽出された（表３）．以下，カテゴリーを【　】，サブカテゴリーを《　》，記載内容を〈　〉で示して，カテゴリーごとに説明する．

１つ目のカテゴリーである【看護技術を実施して学んだ】は，５つのサブカテゴリー《患者にあわせた看護技術が実施できた》《看護技術の成果・効果が得られた》《看護技術が身についていった》《看護技術が実施できた》《学びが得られた》から構成された．《患者にあわせた看護技術が実施できた》には〈個別性をふまえた注意点を考えることができた〉や〈患者のためのやり方で行えた〉など９件が含まれた．《看護技術の成果・効果が得られた》には〈実施した看護技術の効果が目に見える結果として得られた〉など３件が，《看護技術が身についていった》には〈昨日できなかったことができるようになっていった〉など３件が含まれた．

２つ目のカテゴリーの【患者からよい反応が得られた】は，５つのサブカテゴリー《気持ちいいと言われた》《患者に喜んでもらえた》《患者の反応を得ることができた》《患者からよい評価を受けた》《患者から感謝された》から構成された．《気持ちいいと言われた》には〈足浴をして「気持ちいいね」と言ってもらえた〉など５件が，《患者に喜んでもらえた》には〈ケアをすると患者がとても喜んでくれた〉など４件が，《患者の反応を得ることができた》には〈患者の態度が以前より優しくなった〉など３件が含まれた．

【その他】は，２つのサブカテゴリー《指導者のフォローがあった》《グループの団結力を感じた》のみから構成された．

Ⅴ．考察

１．達成感が得られなかった理由

学生の約60％が，臨地実習における看護技術の実施に対して達成感があまり得られなかったと答え，その主な理由として，技術不足・知識不足・練習不足などによってうまくできなかったこと，緊張のためにうまくできなかったこと，患者の自立度が高く実施できる技術が少なかったこと，患者の個別性に合わせた看護計画が不十分だったことなどを多く選択していた．学生は臨地実習を行うにあたって，事前に看護技術の復習をして臨む[4]が，実習中には，その患者に合わせた援助計画の立案に悩み，患者に実施する場面では技術不足と緊張から思うように

表３　達成感が得られた理由

（記載者数30人，記載件数39件）

カテゴリー	（件数）	サブカテゴリー	（件数）	主な記載内容
看護技術を実施して学んだ	(21)	患者にあわせた看護技術が実施できた	(9)	個別性をふまえた注意点を考えることができた 患者のためのやり方で行えた
		看護技術の成果・効果が得られた	(3)	実施した看護技術の効果が目に見える結果として得られた
		看護技術が身についていった	(3)	昨日できなかったことができるようになっていった
		看護技術が実施できた	(3)	様々な看護技術が実施できた
		学びが得られた	(3)	多くのことを学んだ
患者からよい反応が得られた	(16)	気持ちいいと言われた	(5)	足浴をして「気持ちいいね」と言ってもらえた 清拭を「気持ちいい」といってもらえた
		患者に喜んでもらえた	(4)	ケアをすると患者がとても喜んでくれた
		患者の反応を得ることができた	(3)	患者の態度が以前より優しくなった
		患者からよい評価を受けた	(2)	患者からよい評価をいただいた
		患者から感謝された	(2)	「ありがとう」と言われた
その他	(2)	指導者のフォローがあった	(1)	指導者のフォローがあった
		グループの団結力を感じた	(1)	グループの団結力を感じた

動けないことも少なくない．学生は実際の患者に看護技術を実施した経験を通して，改めて自己の準備不足や，患者の個別性に合わせて看護技術を実施するとはどういうことかを理解する．そして現時点においての自分自身の取り組みの不足の自覚が達成感の低さに影響しているものと考える．今回の調査結果からは，学生が感じた知識や技術不足の程度や内容まではわからず，また，知識不足や技術不足が，学生の努力不足によるものか，講義や学内実習，臨地実習指導の不十分さなどによるものかを明らかにすることはできない．しかし，可能な限り不足の状態を解消して臨地実習に臨むためには，講義と学内実習のあり方を検討し，その内容や方法が実践活動の基礎と成りえているかを吟味し，精選していくことが必要である．

学生の看護技術学習の傾向としては，手順にとらわれるあまり，患者の個別性に応じた方法を工夫することに欠ける[10]といわれている．教員によるデモンストレーションやビデオによる学習は看護技術教育でよく用いられる手法であるが，例えば清拭という看護技術１つを取りあげても，対象の状態や状況に合わせてその方法はいくつもある．しかし，時間に限りがある講義や学内実習では１つの方法しか示せないことも多い．学生が患者の個別性を考慮して看護技術を選択したり組み合わせたりする思考を培うためには，学内実習で行う方法やビデオで示す方法がどのような状況を想定して行われているものであるかを十分に伝え，考えながら学習する習慣を育てなければならない．

学生も練習不足を理由にあげているが，看護技術を１回の講義時間内のみで身につけることは困難である．看護技術をスムーズに実施できるレベルまで修得度を高めるためには，学生にも練習の必要性が意識づけられるような授業の工夫とともに，学生が自主的に練習できるように環境を整えることが必要である．また，一般的に行われている学生同士やシミュレーターによる学内実習では，例えば筋力低下がある患者の場合はどうするかなど，患者の状態に合わせた工夫を検討することが十分にはできないため，模擬患者を招いてよりリアルな状況で実習を行うことも，個別性をふまえた看護技術の実施や評価の必要性を学んだり，自分の技術力不足に気づいたりする機会となるのではないかと考える．

しかし，たとえ十分に準備をして臨んだとしても，患者には個別性や多様性があり，変化する生身の個人の看護を行う臨地実習において，学生は戸惑いや困難を感じやすい．教員や実習指導者は，学生が既修の知識や技術を活用して患者の個別性にあった看護技術が実践できるよう支援するとともに，できなかったという現象のみをみて学生が未達成感を得ることがないように，技術や知識のどこがどう不足しているのかを具体的に指導し，どう補っていけばよいかを学生自身が考えられるように支援していくことも重要と考える．

患者の自立度が高く実施できる技術が少なかった，という回答が多数あった．これは基礎看護学実習を履修する学生の準備性を考慮して，自立度の低い重症患者を受け持つことが少ないこととも関連している．看護技術を実施する機会がなければ，看護技術の実施に関する達成感が低くなるのは自然なことと思われる．看護技術の経験回数が多いほど達成感が得られる技術があることも報告されている[10]．実習目標が達成できるように，実施する看護技術の必要性についても考慮して患者を選定するとともに，患者の承諾が得られれば受け持ち以外の患者のケアにも参加できるように調整することも必要と考える．しかし，医療現場の変化や，倫理的課題や個人情報保護の観点などから，学生が経験できる看護技術には制約がある．そのなかで学生の学習を深めて達成感を高めていくためには，学生が看護技術を経験する１回１回の機会を大切にし，実施前の計画の評価と指導，実施中の看護技術の確認と指導，実施後のフィードバックなど，各時期において学生が自己の課題に気づき，課題解決に前向きに努力できるように丁寧に指導していくことが大切である．この際に学生がどのように自己評価し，どのような達成感を得ているかについても配慮することが必要である．

なお，基礎看護学実習において学生が重症患者を受け持つことについては，個々の患者の状態と学生の準備性を考慮して十分に検討して決定している．「患者の重症度が高く，実施できる看護技術が少なかった」を選択するものが無かったのは，重症患者を受け持つ学生が少ないことと，受け持つ場合には指導者または教員の指導のもとに看護技術を実施できるように学習の機会を整えていることが影響しているのではないかと考える．

２．達成感が得られた理由

達成感が得られたとする主な理由は，【看護技術を実施して学んだ】と【患者からよい反応が得られた】のカテゴリーに分けられ，【看護技術を実施して学んだ】のサブカテゴリーには《患者に合わせた看護技術が実施でき

た》《看護技術の成果・効果が得られた》などが含まれていた．これらからは，患者に合わせて考えて看護技術を実施することができた実感や，学内で紙上事例をもとに学習した際には学習できなかった実施後の成果や効果の確認ができたことなどによって，学生が達成感を得ていることがわかる．また，【患者からよい反応が得られた】のサブカテゴリーには《気持ちいいと言われた》《患者に喜んでもらえた》などが含まれていた．これらは看護技術の受け手である患者に認められた体験であり，学生が対象から直接もらった肯定的評価である．学生は自分が実施する看護技術の患者への影響や，患者との人間関係などに不安を抱えて臨地実習に臨むという報告[11)12)13)]がある．そしてそういう状況で臨んだ実習で，患者から認められるという実感を持つことが達成感につながることが報告されている[14)]．今回対象となった学生においても緊張しながら看護技術を実施し，その結果患者に認められることが達成感に影響を与えていることが確認できた．看護に興味が薄かった学生が，実習の成功体験から看護への関心を高め，学習態度が積極的になることもある．

また，学生は自己が計画し実施した看護技術に対する患者の良い反応によって達成感を高めているという結果が得られた．これは，実習全体の達成感を調査した結果[5)]と同様であり，実習において患者の反応を学生がいかに意識しているかがうかがえる．しかし，「気持ちいいと言われた」や「喜んでもらえた」などの患者からの言葉だけを自分の行った看護技術の評価とし，達成感を得ていないかについても注意する必要がある．患者の言語的な反応も，看護技術の評価の重要な要素ではあるが，客観的な視点も合わせて評価していくことも忘れてはならない．目的を達成できる看護技術であったのか，患者に喜ばれたのは何がよかったためか，改善点はないかなどを検討していくことで，学生が得た達成感はさらに意義あるものになると考える．

３．学生の達成感に影響している要因

達成感が得られなかった理由，達成感が得られた理由をあわせて考えてみる．これらの結果からは，学生の達成感に影響する要因の１つとして，看護技術を患者に合わせて実施できたか否かということがあり，患者に合わせて実施できたという実感が達成感を高めていると考えられる．患者に合わせた看護技術の計画には患者の状態を理解するための知識や看護技術に関する知識などが必要であり，学生は看護計画を立案する段階で自己の知識不足に気づく．これも達成感に影響しているものと考える．また，患者に合わせて技術を実施できたか否かには，うまく実施できたか否かが含まれており，看護技術をうまくできなかった時には自己の技術不足や練習不足を反省し，達成感を低めているものと考える．

学生の達成感に影響するもう１つの要因としては，患者からの反応がある．学生は自己が計画し実施した看護技術に対する患者の良い反応によって達成感を高めていることが確認された．

４．研究の限界と今後の課題

本研究結果はQ大学学生を対象としたものであり，一般化には限界がある．また，本研究では看護教育における看護技術の修得という観点から，臨地実習における看護技術の達成感に焦点をあてて調査を行ったが，臨地実習において学生が経験し学習する内容は多岐にわたっており，その達成感も複合的に形成されていくものと考える．今後は，看護技術の達成感とそれに影響する要因や，臨地実習全体における学生の達成感に影響する要因などをより具体的かつ全体的にとらえて検討を加えられるように研究を継続していきたい．また今回の調査では，実習全体で経験した看護技術の総合的な達成感とその理由を尋ねたため，個々の看護技術を指導する際の具体的な示唆を得るまでには至らなかった．今後は各々の看護技術についての達成感とその要因について検討することも必要であると考える．

本研究では看護技術の達成感の程度とその理由を明らかにすることを目的として研究を行ったが，今後は，臨地実習における達成感と，実習終了後の学習への動機づけや学習意欲との関係についても研究を行う必要がある．

基礎看護学実習は基礎看護学科目の履修を終了した時期に開講され，教育課程の組み立てからみると，ここでの学習内容，自己の課題への気づきや動機づけが，各看護学の学びに継続されていくという位置にある．この点からも基礎看護学実習の達成感と動機づけの関係について検討することが課題となる．

Ⅵ．まとめ

基礎看護学実習Ⅱの履修を終えた学生を対象に，実習中に実施した看護技術に対する達成感に関する質問紙調査を行い，以下の結果を得た．

基礎看護学実習において実施した看護技術に対して，

約60％の学生が達成感を得ていなかった．達成感が得られなかった理由としては，技術や知識の不足，練習不足，実施できる技術数の少なさ，個別性に合わせた技術ができなかったことなどが多かった．一方，達成感が得られた理由としては，看護技術を実施することで学びが得られたこと，患者からよい反応が得られたことなどが挙げられた．これらの結果から，学生の達成感は，看護技術が患者にあわせてうまく実施できたか否か，患者からの反応などによって影響を受けていることが示唆された．

Ⅶ．おわりに

看護基礎教育において臨地実習は貴重な学修の機会である．そこでの学びを有意義なものにしていくために，教員や指導者は学生が直面している困難や達成感の程度や内容にも注意を向け，それを次の学修への動機づけとすることができるように支援することが大切である．また，実習前および実習後の学内における講義や実習をさらに充実させ，学生の準備性を高めたり，学生が自己の課題を克服できるように取り組んでいきたいと考える．

文献

1）看護問題研究会監修：厚生労働省　新たな看護のあり方に関する検討会報告書．pp. 184-191，日本看護協会出版会，2004.

2）森岡多栄子，瀬戸口要子，阪井眞利子，松原幸子：A病院看護部における新人看護職員研修の現状報告．香川大学看護学雑誌，10(1)：87-97，2006.

3）井部俊子：看護系大学新卒者の臨床実践能力．病院，61(4)：288-295，2002.

4）桂晶子，小松万喜子，松澤洋子，布施淳子：基礎看護学実習の事前技術演習に対する教育効果の検討．日本看護学教育学会誌，14：279，2004.

5）原田秀子：臨地実習における看護学生の達成感に影響する要因の検討．山口県立大学看護学部紀要，8：93-98，2004.

6）原田秀子，張替直美，中谷信江，高野静香：臨地実習における看護学生の達成感に影響する要因の検討（第２報）―成人看護学実習Ⅱ（クリティカルケア実習）終了後の調査を通して―．山口県立大学看護学部紀要，9：49-55，2005.

7）片山由美，奥津文子，大矢千鶴，赤沢千春，荒川千登世：臨地実習において学生が満足・不満足であるとした場面の検討―臨地実習指導のあり方の一考察―．京都大学医療技術短期大学部紀要，22：53-65，2002.

8）田代ひろみ，門井貴子，水野美香，佐藤美紀，曽田陽子，小松万喜子，大島弓子：基礎看護学実習における看護技術の経験状況と技術修得の課題．愛知県立看護大学紀要，11：51-58，2005.

9）平野千穂美，岡本美佐江，金子代理子，伊吹はまよ，大橋五輪子，松江克美，村上美智子，塩田節子，山岡和子：看護基礎教育における技術教育の位置づけ〈教育の場における技術力向上を目指した試み〉グループ演習を取り入れた看護技術修得方法の検討．看護展望，22(13)：1456-1460，1997.

10）田代ひろみ，水野美香，門井貴子，佐藤美紀，曽田陽子，小松万喜子，大島弓子：基礎看護実習における看護技術に関する達成度の自己評価と実施状況との関連．日本看護学教育学会第16回学術集会講演集，145，2006.

11）和泉春美，山下満子，柳川育子：臨地実習における学生の不安に関する研究（第１報）―はじめての臨地実習を前にした学生の不安に対するディスカッションの効果―．京都市立看護短期大学紀要，26：1-9，2001.

12）山下満子，和泉春美，柳川育子：臨地実習における学生の不安に関する研究（第２報）―基礎看護学実習１と基礎看護学実習２の実習前における不安内容の変化―．京都市立看護短期大学紀要，26：11-18，2001.

13）山下満子，和泉春美，柳川育子：臨地実習における学生の不安に関する研究（第３報）―３年間の追跡調査による実習前の不安内容の変化と教員の関わり方―．京都市立看護短期大学紀要，27：11-19，2002.

14）中谷啓子，丹澤洋子，中村真理子：短期大学（二年課程）看護学実習における学生の達成感・満足感に影響を及ぼす要因―成人・老人看護実習における人的環境の側面から―．東海大学短期大学紀要，33：31-38，1999.